

平成18年11月8日

関係各位

(財)日本バスケットボール協会

## 規則の変更点の概略

国際バスケットボール連盟(FIBA)のテクニカル・コミッションは、2006年3月に香港で開催されたFIBAセントラル・ボード(FIBA中央委員会)に、世界選手権大会以降に施行される予定の新しい競技規則「Official Basketball Rules 2006」の最終原案を提出した。

FIBAセントラル・ボードは、その原案を採択・承認し、2006年10月1日より施行することを決定したのち、FIBAのホームページを通じて公表し、同時にFIBAの5つのゾーン、各国および各地域のバスケットボール協会(連盟)に通達した。

今回の規則の変更点の概略は、以下のとおりである。

ただし、1.~3.については、平成18年4月1日より日本国内においても既に実施されているが、4.以降の項目に関しては、日本国内では平成19年4月1日以降に実施いたします。

- 最後のフリースローが成功したときは、どちらのチームにもチャージド・タイム・アウトや交代が認められる。このとき、チャージド・タイム・アウトや交代が認められる時機は、スロー・インをするプレイヤーがボールを持つ前までである。
- ファウルの罰則で、フリースローののちオフィシャルズ・テーブルから遠いほうのセンター・ラインの位置でフリースロー・シューター側のプレイヤーにボールが与えられスロー・インでゲームが再開されるときは、そのフリースローが成功してもしなくても、最後のフリースローのあとに(スロー・インの前に)、どちらのチームにもチャージド・タイム・アウトや交代が認められる。このとき、チャージド・タイム・アウトや交代が認められる時機は、スロー・インをするプレイヤーにボールが与えられる前までである。
- 第4ピリオドまたは各延長時限の最後の2分間に、次のようなチャージド・タイム・アウトが認められた場合は、チャージド・タイム・アウトのあとゲームを再開するスロー・インは、オフィシャルズ・テーブルから遠いほうのセンター・ラインの位置から行う。  
相手チームがフィールド・ゴールまたは最後のフリースローで得点したときに、得点されたチームにチャージド・タイム・アウトが認められた場合  
チャージド・タイム・アウトを認められたチームのバック・コートから、そのチーム(チャージド・タイム・アウトが認められたチーム)にスロー・インのボールが与えられてゲームが再開される場合  
このとき、スロー・インをするプレイヤーはセンター・ラインの延長部分をまたいで立ち、コート内のどこにいるプレイヤーにボールをパスしてもよい。  
このとき、スロー・インをするチームは、フロント・コートにボールを進めたとみなされ、8秒の制限は終わったことになる。
- 負傷したプレイヤーがいったん交代してしまったときは、そのあとすぐにタイム・アウトが認められ、そのタイム・アウトの間に負傷の手当てが終わったとしても、引きつづきプレイをつづけることはできなくなり、次にゲーム・クロックが動いたあとでなければふたたびプレイヤーとしてコートにもどることはできなくなることに変更される。
- ショットの動作の始まりの表現が「ショットをしようとして腕を上にも上げる動作をするためにプレイヤーがボールを片手または両手で持ったとき」に変更される。  
これは、FIBAによる規則の解釈の統一見解に従ったものである。
- スロー・インの際、スロー・インをするプレイヤーは、ライン沿いに1mの範囲内であれば、一度動いてから逆方向に動いてもよいことに変更される。

7. 「チャージド・タイム・アウト」という用語が「タイム・アウト」に変更される。
8. ショットされたボールがリングにはさまってしまったときは、ボールがリングに触れても24秒計をリセットしないことに変更される。  
もちろん、防御側チームにオルタネイティング・ポゼション・ルールによるスロー・インのボールが与えられるときは、あらたな24秒が認められる。
9. 24秒計が誤ってリセットされてしまった場合も、原則として24秒計は訂正せずにリセットした時点からはかりなおすことに変更される。  
ただし、防御側チームが著しく不利になると思われる場合は、24秒計を適切な残り時間に訂正する。
10. ショットのボールが空中にある間に24秒の合図が鳴り、そののちファウルがあったときは、そのファウルがパーソナル・ファウルであったとき、ファウルののちボールがバスケットに入らずリングにも触れなかった場合は、24秒のヴァイオレーションが成立したので、そのファウルはなかったものとみなすことに変更される。
11. フリースローに対するインタフェアに「最後のフリースローのとき、ショットされたボールがリングの上ののっているときに、バスケットやバックボードに触れる」という規定が追加される。
12. 時限の終了の合図とほとんど同時にショットがなされたときにかぎり、主審の権限により、ビデオ等の撮影機器のリプレイによって確認してもよいことに変更される。  
これは、FIBAが映像によるリプレイを認める初めてのケースである。
13. 処置の訂正について、細部における修正がなされる。
14. 「スコアキーパー」、「アシスタント・スコアキーパー」、「タイムキーパー」という用語がそれぞれ「スコアラー」、「アシスタント・スコアラー」、「タイマー」に変更される。
15. タイマーが合図器具を鳴らして時間の経過を知らせる時機に、「各ピリオド、各延長時限の前のインタヴァルの計測が終わり、各ピリオドが始まる前」が追加される。
16. 審判の合図に、5秒や8秒をかぞえるときの合図が追加される。
17. スコアシートの記入法で、タイム・アウトの記入方法が変更される。

以上